





竹園抄目錄

一 歌 下 嬖 病 之 交

二 詞 事

三 親 疎 句 之 子

四 六 義 之 子

五 取 中 歌 所 之 事

六 返 事 祈 之 子

七 題 存 知 之 子

八 懷 紙 之 書 事

和合文庫



九 披薩座席之り

十 於名物題府知之事

十一 風野之り

弄病之事

柳古人はりの弄く奇此名残所くいと極座席病

八病等思病之病弄り病と病人病と病も病弄り病申病病病の病所病の病

おり病弄れ病の病弄り病く病候病は病病病お病わ病く病て病神病心病

然病の病の病云病弄病よ病ま病ま病ひ病ぬ病き病ゆ病ん病り病要病弄病と病

里病て病六病の病や病ま病ひ病と病知病き病り病一病小病回病病病二病よ病八病回病

字病病病三病よ病八病乱病思病病病甲病よ病八病風病俤病の病や病ま病ひ病ま病よ病六病

行病類病病病六病よ病首病尾病病病一病小病八病回病病病の病病病六病一病首病

の病ら病小病ね病き病一病一病の病わ病ま病ひ病お病ま病ひ病み病の病ら病

ありたへい

新波はよ<sup>ら</sup>やこれ花をこり

は然ら<sup>ば</sup>は<sup>ら</sup>やこのはれ

は奇味やこの花とつ<sup>ら</sup>相阿ま<sup>ら</sup>お<sup>ら</sup>じ

わも<sup>ら</sup>み<sup>ら</sup>侍連とも<sup>ら</sup>遊代<sup>の</sup>後<sup>に</sup>た<sup>ら</sup>した

三句の<sup>ま</sup>つ<sup>ら</sup>あり<sup>ら</sup>それ<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>か<sup>ら</sup>あ

あり<sup>ら</sup>よ<sup>ら</sup>ら

か<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>白<sup>き</sup>ら

は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら

か<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>白<sup>き</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

乃<sup>ら</sup>句<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

お<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

その<sup>ら</sup>中<sup>ら</sup>に<sup>ら</sup>同<sup>ら</sup>字<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>拾<sup>ら</sup>合<sup>ら</sup>て<sup>ら</sup>や<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>く<sup>ら</sup>記<sup>ら</sup>入<sup>ら</sup>た<sup>ら</sup>へ<sup>ら</sup>

花<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

芳<sup>ら</sup>御<sup>ら</sup>て<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

花<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

あり

山みみ秋とそみゆ家あつたも

こころくふお舞つたも

山のちとまのいといとまあつたありふた

ういふ下のあひいあても一白のうらあつて

よのあつたのち乃名詞の字あてもみだら

いまらあつたあつた名と詞と格合辨

書もみえぬあつたあつた

まのつたつたあつたあつた

書れはとみえはのすくみはにまのつたあ

まらふあり三乱思病とよのあつたあ

あえはあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

よのあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

善し申の夢はうらなうとたえと

と梅もわらわらうとこやうらうら

こゝろのまに乱思乃病をまらひそこあは  
らぬ女も然もう海へたりそよねをうら  
あははやまひのつれづれ——田風傳病と  
うらひのこゝろとこゝろとあとの世をうらあ  
と異るうよわの家あしたと人の身は遠く  
よまん親は母もあはれうらうら——まことい  
てあはれはあはれけてはきこふらけりぬらう

うのうたにうらう花は遠くあて

山あはれそれともみえはゆき

あはれうらうらわらわらうらうら

そいおひのうらうはかれ花はうたにあらうら  
海——とよう海もよ花はそれともみえは  
くものこが海ともあはれ風傳病あり  
白河院乃清字肉あはれ清字合れま  
あはれあはれのまよりみちら成題よ

入口は尾上のやうにあらる井

うつら余高のふ葉あゝん

いふ月神もやうく良方と何所有るも  
風傳の病のふれくてもまけふあふれぬいふ  
入日におふうつらもぬ葉は見えそふ家  
へき成り日乃ややぬ葉あゝあゝん  
縁の類のためよハ面目あはれなりこれあゝん  
あまあり五斤類の病とふハあゝん  
こくはあゝんこくを我ハあゝん  
あゝんのあまは病くあゝん  
たゝん名高の月ハあゝん

あゝんこくはあゝん  
あゝんこくはあゝん

是ハ村上の四時世ふそあつらひあゝん  
あゝん乃あゝん作者ハあゝんあゝん  
あゝんたゝんあゝんあゝん  
あゝんあゝんあゝんあゝん  
あゝんあゝんあゝんあゝん  
あゝんあゝんあゝんあゝん  
あゝんあゝんあゝんあゝん

月影のうつらりせは出づる

とあやうはあやうとあやう

乞も月影を参る月影ふと花散も月を  
これし縁とひ家花はつらつらめめく侍  
六首尾病とひ上の句れ始のめ句と下れ句  
乃たりりとけあぬ歌あり奇はふも上  
も下も結い合くあといふは上下け  
何ぬいた詞とあやうあやうとあやう  
奇はいつく

思ひまや海山の奥はひりり

書さううらじをむとあはう

上の句ふあひまやと何う下れたるりふハ  
詞然けくうはすまひとあやうとあやう  
とらうくふぬれはあはあきれらあひ  
うふもこれとらうとあやうとあやう

射詞事

射詞といふは道まうく秘すはああり  
まゆいといふはあはあはあはあはあ



詞成對すかやう成さしあれい奇ふあふも  
對云くふいたと人の問答のこもよは構と  
あふ下に句ふも嘆もちかもふもふも  
本みけも花は縁あかよは成對はへ  
月と上小何ふ下にらまあもあやけ  
とも對すへ一はふはまそ双對亂對もく  
ふも川有双對といふうらと首成對し  
中と中成對し下と下成對はく

構花咲ふりしを吹風と

あふかふにふひく白き

何れ花といふ對はあふと吹風ふ白きと  
對すうへはふ何れは志ああり上は構と縁  
く下に花と對はくやう何れは花あ一抽あれ  
とも詞うらりねまは上下に對してもあふか  
うは上三百下二百はうちあれ上下に對し  
て中成對すかやうも何れ又た成對はけ  
大なる成對はくもあありまはまはくはひ  
久しはは津みそくのやういふ

月よつれゆく山のあはれ風

是ハ久々に月試射一やふ風試射十かへ  
これハ中試畧すか奇あり

玉川の里れ卯花ありとも

みゆかちうりにけうはむけき

是ハ卯花ハ月試射はくは是ハ中に中試射  
すか奇ハ大意乃射云ハ

かろくやちりくはくの新音も

はくこれハあはれく思ふ

是ハ上の白ふりく浦とくはく下の白もは  
これハ舟と射きり是ハ大意の奇とくふ  
あり礼射くふハ二種あり一ハ上の白れ初め  
細試下の白れとりに射て中試く人ハ射  
下試上中に射はくハ中試ふいり

毒乃花それもみは久こと乃

あまれば書れあはくあはれ

これハ上ハ中試射十か奇あり梅ハ雪試  
射はくあり

あつら花咲ふくしむは是引の

山乃うひらりて世海しつら

花の上下枝射はるる花あり横花は白雲枝  
射はるる二ふの上の細枝とくくけけに  
上ふあは来草月花枝下の句よ射き  
もふらり枝射すはあり奇よいり

月やあぬ春やじつは春あぬ

夜うむむらりりよの月ありて

花の月も春も下に射はる細き花れとも  
大なる花枝射はる奇の六百多々れとも  
花の射よすくへくは花はゆん人のころ  
しゆ枝とくくえて疎へきあり花の枝  
奇れ秘るる花はく人よゆらへくは  
小く枝るる花は家たし花ありとも  
一切射よより人きをり射はる花を  
ん奇の秋よあは

親白事

花又奇の中れ秘るる花はく人よゆらへくは

くしくむたへく一親白よぞれく二控ま  
くめはひきまされ親白二よ八正の親白ありむ  
きの親白よほきて又二控ありくよ八父  
お通二よ八め音連解ありめ音お通ゆ  
ちれちもくくしくあひおんく又五音  
連解といぬ七ぬ七この白れむ死へひれ  
志まされくくく音れ命あきあり  
かろくむむむらのかよよせいあひく  
とくくかくく入解くくゆて

是ハ時を成る者ゆふく音音にあかひ  
たと何くハゆ縁をくもくみゆりまきまの世  
ふくゆへくかのかのくときとくふくよめむ  
きあり解れこれめ知へくくゆくつき  
あくゆゆひとあれゆらありたとく  
くくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
花のゆゆあゆゆのくくあれ  
くくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
とくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

奇ハ正の親白のこゝありきハあら美徳の中  
乃こゝありたえハ六家九章ハあらあはれ  
こゝのれこゝのれこゝのれ奇あらん  
又五音れ目ハあらんけこゝのれ  
たえハ

物々すみ森れあすもみねと

あらふこゝのれ花の香りこゝ

物々すみれみこゝのれあはれこゝのれ  
のこゝありのみこゝのれあはれこゝのれ  
とたらたのれあはれこゝのれあはれ  
是れりりてあはれこゝのれあはれ  
きこゝのれあはれこゝのれあはれ  
奇こゝのれあはれこゝのれあはれ  
後やすれあはれこゝのれ

六義事

六義ハ正の親白のこゝありきハあら美徳の中  
解形二粒ハ大秘りありあはれこゝのれ  
へこゝのれ六義ハ正の親白のこゝありきハあら美徳の中

風とつふくそ人奇ありこれ大志哉あはれ  
こころ此物よつひあつてこそまらねん  
ういあり

難波つと喧やこれ花をこころ

今いそゆくとあやこれもか

いそよに酒天宮れゆ中才治れ雅念れ家  
とよよ位城ゆつりて圓小玉あはれ事三年こ  
兄い又意神天宮れゆゆり成えゆひこれ  
位よつとゆいあきこけ免ゆりも才い先哉

と記く位よゆえうる中運うそあれはう  
位小いつとゆり縁とそひあわくたまらりさ  
てらうあてに位位よつとゆひくわそれ哉  
王に大長しもあゆあく難波と仁徳のたに  
まはる文の名あひるふの律もあやこれ花を  
あひりこつとゆらうおよつとゆいも花いあき  
あましむいあつ時の花よあけ運い冬あひり  
さよあひ今いそゆくとあやこれ花とよふ  
いまこころ時の花よあひあり姑あひあひて

あしすんそ仁海の清事一はまこころ祿も底の  
ふふ仁海のうやけりう家文成風のこ  
ごもつああり風と六観あり諷とつふたそん  
あり祈みえのこもこをれあのおあそりて風  
と智るこもくにせれ奇のあり事成と物  
ふあそりてより何うええこ二よ六賦の款と  
つふ合白れ奇あり一首ふこころあまこ何家  
ああり賦とつふ字成くの家もよりみつるは  
よあり何くハ一首に詞何まこ何下しあり

咲苑よあひはくはあられあさ

あふつるきれいあもあはく

咲苑よあひはくはあられあさ  
きこつ文選よ八骨れ字成つるひ列典よ八骨の  
字成つるあり史記ハサも書成つるひきとふ  
也相如野章之菴合々も書成つるひ書と  
つり文集ハ巻書身命女書不系こ  
三よつひ乃奇とつふあそこころありあは  
あふつる書もたあ何あならせたら

少家あり本歌よいつく

恋ふと物何一たの物もあまらざらん

恋きくはなうやわらん

是ハ君よわきて命ハ消ぬまきも誠おれ消ぬ  
念ふはたうとあるく可ハ真の身とよハ物よあへ  
ていつまでもあざりとよハ君別ハ形とよハ風  
比興の連もたうとありとよハ君をいふとんを  
たとへ比ハ形と形とたとへ興ハぬとへてかも君別  
はうがかりあへ本歌よいつく

我ハひがらじもつき一たりそ後の

ら後のまふ妙ハみはくも

五子雅のこやうよハ是ハ物もたとへはて

只はくしとよハあり

偽のあきせありせハけり

人乃とれんれハけり

六子頌の奇是ハ後の方ハ後ハ後ハ後ヤ  
つふあり巻巻後後後ハ頌とつふあり本歌よ  
いつく



いぬいびくもえんくわらねの

さしうらふふまのはりきり

いとのる程といふ事ありあき程と松こ  
是城あきくあといふ大唐此道列よ水  
ふらして是城のむいよ人の命みらき  
也い里よ松城うらよ是城あよつれえすあり  
らうて彼國よ八むのさびき事来と云あり  
あらとあきことたあひひきくふらゆり  
あきといふくさの持あり事にあはき此

種あり日本記曰

志代のち海ねくえ城引ほひ

あふ事あはといふと我さふ

是ハ者られ王子れさあり又らりえらり  
とハ楊國右楊貴妃の宮よらりて家ハ業  
派事三株四株と云利

本款元極の事

本家城とゆよ曰れや一あり一あえん系城  
ひらひあしてら城久二あえん城ひらふ

あゝ詞賦久三小本歌乃上下は句賦うら  
久一そと家家小本歌の大立賦を家久相  
ひひとそひひらあうらるる

梅の花を根もみえぬ久三此

阿まきし家書はもてやまてハ

こね賦と家書

毒はれを根もみえぬ久三此

阿まきし家書はもてやまてハ

ふひとそひひらあうらるる

月やゆぬまをひし書あぬ

わらひひしハ本の書あて

こね賦と家書

春やあぬ花をひし書あぬ

あうらるる我ハ本の書あて

本歌の上下賦うらるる

思ふ事ハうらるるたはひ書あぬ

わらひひしハ本の書あて

あうらるる

我ら此世に於て人のあはれん  
ちよき世にあらんか  
大言成らざる事

まよふ心にはいかに世に於て人のあはれん  
かゝる世にあらんか  
いかに世にあらんか

まよふ心にはいかに世に於て人のあはれん  
かゝる世にあらんか

かゝる世にあらんか  
まよふ心にはいかに世に於て人のあはれん  
かゝる世にあらんか

海軍新法

行状に於て人のあはれんか  
まよふ心にはいかに世に於て人のあはれん  
かゝる世にあらんか  
まよふ心にはいかに世に於て人のあはれん  
かゝる世にあらんか  
まよふ心にはいかに世に於て人のあはれん  
かゝる世にあらんか

ふいよ下れ廻成合し申しより申しふへりては  
あり三我らむらりたれ人の御事ふいれ  
うたは首領とて家持のすまはよきあり  
甲よ野越とて一とて口まは御成ひもよ後  
くそいふあすよも成いりて又けかゝ道事  
の身よありて大意いりばさりてしむやいり  
一家らまは御人のせま

思ひつけの表成る御事人うか  
御し人よ結るいん

せがみあは御事

結んてあひもひうすあぬ  
うき御成さけくたれのを  
ニよも御事一程の人なり御事

あつちやう御事御事  
ちかいらいりてあは御成  
と者人

七文れうにわはれぬらまらり  
しむいあもみたりありあり

又〜

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

題存知事

題存知事

題存知事

題存知事

題存知事

題存知事

題存知事

題存知事

題存知事

あひあまらりて人よ知くくく誠極く思ふ  
こひよいあられも海部之山家の歌あく  
くむよあまらりに山あく居く一誠ひく  
難くも家のくくあ海部よまあ奇ありけ  
おく海よあれ一名月の題誠常月よ  
你あまの海部とあ海あり名あれあよ花  
乃真のこひく名あれああれ海部と  
あありがあにいりく思ふ思海部  
まはりにあるまうくく思ひん

こひいと今あれくくあ

山家為題

里と城と深山のちく思ふま  
あよりあられくく乃まら風

名月為題

更海求月ああ思ふああ  
物思ふくく思ふああ

名花為題

山あつらわきて思ふああ

ところろくはを花はるき

くはくあらんか落類かきありは  
類よあつ所家あれ所

海老月

清見をさる浪も音つれて

うらたつら海有乃月

へふも歌紙懐かうらふひ入る歌念  
ありいふ面白記奇ありを類紙もま  
しみぬまはあにわつたしやう月てはあ

乃出集たらんわく歌何くたつたへ  
ありつるくう記あまぬれ八部の籍かき  
ああり行歌のうらふもかき  
類はあといふ心縁と縁かき歌紙へすく  
を記てうらあ海物紙ひのうら家あへ  
ハ類よあうもさうう月侍歌

月栄よひらりそ海さうむ川の

卯花垣の雲紙さうや

これハ月紙そ字ぬく卯の花紙懐か



奇あり録の題にこれをして知へしき人に  
のあやまふ事あり

懐紙書事

押さへ懐紙をとりしるべし一これ一夫  
るありし方よは四書よ四文の紙を用  
紙よ懐紙をとりしるも二条家六条家よか  
り何り先二条家よはきく二二首の  
題ハ一紙より二首の題をればは六寸を  
録の字はくし録の字ハ上二寸をくし  
録の字と竹首れ和安とよしと上右ハ字  
調よきたりし哉道比ハ引けりてくし  
録と題の何ひこ二寸をくし一字ハ  
ひきつけし題のくしはありし文字  
乃題もこれくし奇と録と向かひし  
くへきなり家名録ハ録と題乃同し者  
下官姓名意友人ハ姓名録くし一併ハ  
くし一見ハ姓名をくし女ハ名ハりせり  
又録よはめられし三行三字にくし一  
は時ハ

二首れちありともくら守祿頭奇れり五合  
よかえー三それちありれとく一首のちれとく  
あそ一紙のうち紙ましくりそかえーみそおち  
紙ぬれみお上下れ白二紙よかえきありあよ  
のひら実名紙真ふくへーゆりけけ八中  
あそま紙くあり又名紙はふよもひきさけ  
てうへきありけけうへきふくく出まへ  
貴人のあうまひあり二紙お帯れ三首二そ  
り紙あり書評

於懷紙の才

詠三首和歌

千鳥

辰東惠補

なまこてめうたの浦乃  
ゆよらうりあさひよちち  
のうらひ

庭雪

家たみち跡けけ  
庭の雪八人のさくぬち

うみありあり

思恋

いそぐのちふとたゆみ

あふせまのしほじと恋の

くゆしづらうな

諫一首和歌

和言のあふむし行のちあふく

寿松祝

えり代の乃とく

すちかひけぬよちあふ

けいふきー乃む

あまら

お六そらり百首ふとふまそはたふ二つて書

又あふんふれあひ田三一一二二二二二

四二一とくくえは又のわくおもひ

亦神うれおもせもえげくうえん

志のひ孫

乃あふん

た

おまへ

いふ

し

いふ

おまへ

し

おまへ

いふ

し

又札のあは二ぢふもまそ解又字ハ下おも  
かくし

まへらの文ぢふれ

解まけハ何ぬわまの

あまのうけ

乞祈ようん——肉裏院家よま候うふハ  
懐紙のよ紙候うそた者うく又書よとふ  
ふんたいのううへにまへ——大長徳ハ其  
乃ちよ紙候うまの乞もゆりまへ又書よハ

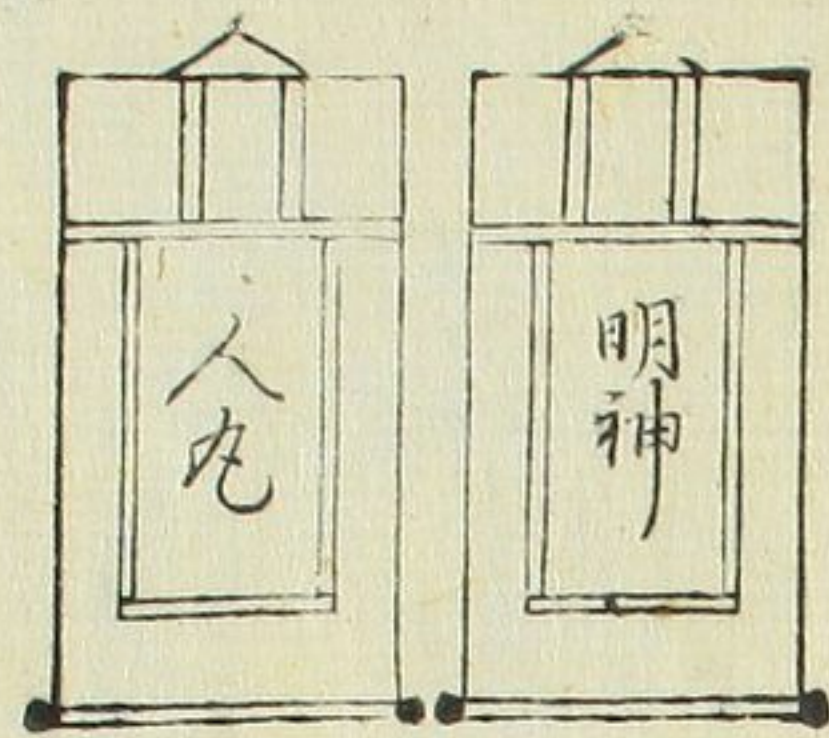
おのゝりし人のいふに我居へきま  
とけしうひてとくまぬりこれらハ一  
乃秘する撰要興者亭訓集より六条  
よハかりとうありこそ二そと三外  
くぬりまおハ回する人ハ  
とちよも亭の下に名残くま  
く〜女ハ懐紙ハ名紙ぬりあり  
と教書の亭紙や〜  
く教しむ人ハきられけり  
けりよ亭紙なり女余ありとも  
おぬまハ男ハ〜  
も〜  
か〜

和語梅作法

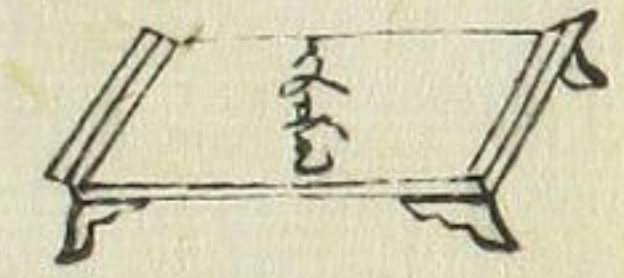
常此披梅よんぬ於の事紙りあり  
ハ座席と〜  
ちようけ〜  
〜

角一々の神人丸乃まゝ又臺つ移の  
 一々花執香焼香用伽可備之檀供亦め  
 常執の前も又臺紙丁人ふんたりのたけさ  
 一々座紙志く一々禪師座之又志座  
 一々禪師座ありたあまた紙ありあ  
 上藤の座たふ小はつりてそのほきに昔経者  
 伽保師の座紙一々之し執等の座不定之  
 一々ふもきう人き紙て作あり

座席事高戸樂あり



花執  
 飯會丸  
 菓子香  
 飯用具  
 花餅

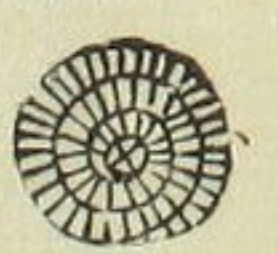


式作



上藤表紙の御宗

禪師證信の座



禪師證信の座

上藤見方作事

ゆく會の集會席よりそまゝんふの面をつねの  
ほむ紙をんして居る着座をぬき小むし戸  
つきて元紙あけて入るがこまゝにて又其を乃  
きつよゆりてちも紙地を居けてついで  
志の神の下より懐紙とさうさうして又其の  
すまをくへきありくれくくして衆みま何  
ほまのて座つかく小居ゆまふあり懸え  
乃伽施とりて式師舞よ何ゆきり下座  
の音よりほかきひきよ龍紙よりみあはれ

あり初の一詞はゆり勢小次二返の海座同  
書よ鼓紙のへく急つひくはゆくひきよ懐紙  
下篇は志にあり上篇は上よぬありゆり  
ころ懐紙と又書よとさう讀師が座よ  
志のつきに海座とりて座よほまをゆり  
しよ少て音紙よみあは書紙つよありけ  
時波座おひくよ難とも保紙のたへし南性  
ふ事ふ高居判者れ許へ急くと又南座  
り判者有六條の位紙のを記く又判と

うひく事紙定海ありゆく披海とりりそ  
徳寺何首紙いふ積寺よ八詠の字紙か  
はなよ詠とんしめふ何げそ何款とみ細  
と詠ひうわあともみ何く家く普通道のうこ  
よ八詠十首れわあうそはきこに詠れ名紙  
らみとらて連寺の執筆い悪量にきさう  
へきあり連寺酒宴あそとそいふあは後法  
とてふりへく款いたく詠きは上方の勢を  
うけて細書に詠ひんきと難保来ののめく持く

ろあは紙は名紙の事といふも上首紙結へ  
たうこいふ紙わあふへ出へきあり

名物類事

難波江の寺よ海んよ八首のんて紙よしへ  
めふ更波ふらりうら東も月村あきうら紙  
やう紙詠へく吉野志賀舟八苑はちりてのぢも  
苑あまやうによしへく想て名物名紙よじうい  
てはきあはあしとくも有やうに後入きあり  
苑都る月雪は紙よ真行るやうよしへく



風神之事

乞ふとひくすの湯身有つぬたぐぬまの奇  
二めんほつりひらき三奇三ふてめんたぐ  
き奇四六理五粒じうぢめぬたぐあまた  
五秋六ぬゆほつりく奇七よ古神のあ  
八よこくはくはく入くくあ九母くくはく  
すくす十めすくく奇  
一たぐぬまの奇

いひぬまのあはくはく

ぬまのあはくはく

二めんほつりひらき

あひぬまのあはくはく

あはくはくはく

三めんたぐく

あはくはくはく

あはくはくはく

四めんたぐく

あはくはくはく

人の心乃葉にれし海

またりよまはらうの歌

雲は花枝をよそふさうらみ

おのひは枝にけらりてうらみ

六物 ー ー ー ー ー ー ー

風吹は雲よ横きうあはら雲れ

おもひぬこにあらわらうらみ

七古新の歌

みあつちみよのまうくはきり

らきりそふも月よみのりり

八古葉よの心枝にれらるる

雲は花枝のふらびにけ

うらひてうらみよのうらみ

九古葉の心歌

我忠は花枝をよそふさうらみ

まはらうらに風はらうらみ

十物 ー ー ー ー ー ー ー

あはらうらに風はらうらみ

そのうらと成うらあけまら

元新おゆと之たは十小十くくははか  
不善同書とそ十體有あふへー不てと  
化え善白赤の秘るあり元這抄の竈櫃  
秘事の帷は傳神ふのためは書をくぬ  
為取入るあり小童の時竹園あそとく人泣く  
海民歌々入る殿乃之系成爲取ありま  
あつあゆふあり世る小末枝を海抽く穴貫  
五の方おえり秘竹乃苑ゆく山子り

とく人泣くく為家乃祠あり仍竹園抄  
者あり

寛永廿一甲 申無射吉辰 武村市共末  
二条通松屋町

刊行

